初代校長プールボー先生ー涙と共に種を蒔く者ー

学院長　嶋　田　順　好

宮城学院よりも一年遅れで札幌に創立された北星学園は、創立 130 周年を記念して『サラ・スミスと女性宣教師　北星学園を築いた人々』という本を出版されました。その本を繙きながら北星の創立者スミスの歩みをたどるとき、常に私の念頭を離れなかったのは宮城学院の初代校長となったプールボー先生のことでした。

19 世紀中葉のジャーマン・リフォームド・チャーチは、聖公会、長老派、オランダ改革派、組合派、メソジスト派等に比べると日本への宣教師派遣が 25 年前後出遅れました。同教派から最初に日本へ派遣された女性宣教師がプールボー先生とオールト先生で、1886（明治 19）年 7 月 2 日に横浜港に降り立っています。そこに 10 日間ほど滞在している間に、先生方はフェリスを始めとする先発のミッションスクールを視察します。その結果、横浜、東京地域には、もはや自分たちの分け入る余地はないとの見立てをするのです。その折ホーイ宣教師から仙台に新設する女学校の校長に就任するよう要請を受け、先生は迷うことなくそれに応え、仙台に至ったのは 7 月 16 日のことでした。すでに開学準備が進められていて、校主を押川方義牧師とする宮城女学校は、9 月 18 日に創立記念式典を実施し、同月 24 日から 10 名の生徒をもって授業を開始しています。

電光石火の早業とも言えますが、日本に到着して 3 ケ月もたたないなか、言葉はもちろんのこと、日本の文化や風習にまるで習熟していないプールボー先生が、伊達政宗を祖とする歴史と伝統を誇る城下町仙台でミッションスクールの校長となったのです。人間的には不可能と思われるような使命を担うことになりました。事実、先生は心身ともに困憊し、最初の卒業生を送り出した 6 年半後には志半ばで帰国を余儀なくされています。

スミスの場合はどうでしょう。彼女は 1880（明治 13）年 9 月に横浜港に降り立ち、その後マリア・ツル―校長のもとで築地の新栄女学校（後の女子学院）の教師となり、3 年目には校長に就任しています。しかし健康上の理由からその年のうちに退任し、療養も兼ねて居留地のあった函館に移り住みます。その地には元桜井女学校（後の女子学院）校長であった桜井ちかが、夫と共に日本基督一致教会函館教会建設のために勤しんでおり、彼女もその伝道活動を助けることになるのです。

1886（明治 19）年に北海道庁が札幌に設置され、道都となった札幌に北海道尋常師範学校が開設されたことを契機に、スミスはその学校の英語教師となることで札幌にミッションスクールを開設する橋頭堡を築きます。そして 1887 年 1 月 6 日、彼女は 7 人の生徒を伴い函館を出立し、小樽経由で札幌に至り 1 月 15 日には私塾として女学校を開設したのです。

スミスは札幌における歩みを始める前に東京で 3 年間、函館で 3 年半を過ごし、言語を習得し、女学校開設のために必要にして十分な知識と教育経験を与えられるのみならず、有能な先輩女性宣教師、聡明な日本人女性キリスト者たちとの深い人格的な交わりを築きます。しかも、道庁が設置されたとはいえ、当時の札幌は人口 15,000 名ほどの開拓村にすぎません。すべての住民は移住者で、歴史や伝統のしがらみもなく、札幌農学校には優れた外国人教師が集い、その 1 期生、2 期生はほぼ全員が熱心なキリスト者となっていました。つまり、日本のどこよりも西欧キリスト教文化への理解がみなぎっている土地だったのです。さらに長老派は、日本における宣教活動の最初から有力な地位を占め、すでに日本に関する豊富な知見を得ていたことも彼女には幸いしました。いずれにしても雌伏すること 6 年半、その期間が本人の思いを越えたよき訓練と備えの時となり、満を持して札幌に女学校を開設することができたのです。まさに白いカンバスに自分の願っている絵を存分に描く条件が備えられていたと言えるでしょう。そこにプールボー先生との大きな違いがありました。

プールボー先生の場合は、ないないづくしのなかで文字通りゼロからの出発ともいえる状況にありました。それがどれほど過酷で労苦に満ちたものであったことでしょうか。先生が直面した課題と試練を理解するためには、私たち自身に繊細さと愛に満ちた想像力が求められます。詩編 126 編 5 節には「涙と共に種を蒔く人は／喜びの歌と共に刈り入れる」とあります。それはまさに最初の 4 人の卒業生を送り出した時の先生の思いそのものであったに違いありません。ですから、わたしたちも涙と共に種を蒔く労を厭うことなく、喜びの歌と共に刈り入れる者でありたいと願います。